

<原 著> 第45回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

当院における衛生委員会の活動状況

高山赤十字病院・総務課¹⁾、同 口腔外科・衛生管理者²⁾、同 内科・産業医³⁾、同 薬剤部⁴⁾、
同 事務部長⁵⁾、同 病院長⁶⁾

田中 君枝¹⁾ 大久保恒正²⁾ 浮田 雅人³⁾ 和田 泰明⁴⁾
奥洞 克彦¹⁾ 小林 正和⁵⁾ 棚橋 忍⁶⁾

A report of the hygiene committee activities in Takayama Red Cross Hospital

Kimie TANAKA, Tsunemasa OHKUBO, Masato UKITA, Yasuaki WADA, Katsuhiko OKUBORA,
Masakazu KOBAYASHI and Shinobu TANABASHI

Takayama Red Cross Hospital

Key words : 高山赤十字病院、衛生委員会、メンタルヘルス

はじめに

高山赤十字病院（以下 高山日赤）における衛生委員会は、昨今の医療の厳しさと相まって2007年7月にメンバーも刷新されて新たな活動を再開することとなった。衛生委員会が再結成されてから、主に職員のメンタルヘルスを重点的に取り組むことを目標として、衛生委員会としての活動の方向性を探ってきた。しかしながら、高山日赤における衛生委員会としての本格的な活動内容としては、それまでややもすると形式的な内容に偏っていた衛生委員会から実働的な衛生委員会に変革するためには、衛生委員会のメンバー全員が初心に立ち戻り、いちからの再出発をすることとなったわけである。今回、2年余りの活動内容と今後のあり方や方向性について報告する。

目 的

新生衛生委員会の主な活動目標として、『1：全職員が心身共に健全に働けるようにする。』『2：全職員に働きやすい環境を提供すること。』のふたつとした。この目的を遂行する具体的方法として、『1：全職員が心身共に健全に働けるようにする』ために、①産業医を中心として衛生委員会が全職員の健康診断に関与する。②心身の健康を損ねた職員に対しては速やかに対処する。③1

回/週に院外より心理士を招聘することにより、メンタルヘルスの4本柱を構築すると共に職員のメンタルヘルスを充実させる。④全職員を対象とした『職業性ストレス簡易調査票』の実施をすることの4点とした。

『2：全職員に働きやすい環境を提供する』ために、①2名の産業医と2名の衛生管理者がそれぞれペアを組み、2組で1回/月の院内巡視を行うこととした。巡視の目標として、各部署に於ける職員の心身状態・照明・騒音・劇薬・清掃状態・休憩時間・カンファレンス状況など職場環境について細部に渡って把握し指導が出来るように努力をすることとした。この巡視結果は毎月開催される衛生委員会にて報告し、改善すべき点は速効調査・改善することとした。

結 果

「1：全職員が心身共に健全に働けるようにする」に対する結果：

①定例衛生委員会にて、全職員に対する健康診断の具体的な施行方法についてその都度検討し実施することが出来た。

②心身の健康を損ねた職員に対しては、定例衛生委員会を待たずに産業医を中心として速やかに対処可能であった。

③1回/週に院外より心理士を招聘し、メンタル

高山赤十字病院 衛生委員会 作業環境パトロールによって改善されたこと

月	職場	改善事項
2007年12月	1病棟5階	標本作成のために使用するホルマリン臭を遮断するため休憩室との間に壁を設置。
2008年2月	1病棟4階	避難経路を物品がふさいでいたので片付けを指導した。
2008年2月	1病棟4階	休憩室の手洗いを改善。
2008年2月	1病棟4階	シャワー室の湿気がひどかったため、換気扇の排気量を調整した。
2008年2月	未熟児センター	床コードにカバーをした。
2008年4月	2病棟3階	ゴーグルの着用が徹底されていなかった。ICTにもどしてリンクナースで公表した。
2008年4月	2病棟4階	不要なポータブル便器があったため処分したところ収納スペースができて片付けが進みずっぱりした。
2008年4月	救命センター	床コードにカバーをした。
2008年5月	2病棟2階	身障者トイレの手洗いに自動水栓を取り付けた。
2008年6月	栄養課	夏場の調理作業による脱水を防ぐため、飲み物を用意することとした。
2008年7月	整形外科	使用していない排水口からの臭気に対して防虫も兼ねて配水管のため水をいれた。
2008年7月	薬剤部	薬品棚を耐震器具にて固定した。
2008年9月	小児科	患者用トイレのリニューアル、点検票の整備。
2008年11月	眼科	電動で上下するコンセントを作りつけに変更。
2008年11月	耳鼻咽喉科	点滴室の照明を独立したスイッチに。
2008年12月	眼科	暗室の空調を改善。診察室の看板を改善。
2009年2月	心療内科	窓口業務担当者が休憩の場合にヘルプ体制がとれるようになった。
2009年3月	口腔外科	診察室と技工室の間に壁を築壁。粉塵対策。
2009年3月	人工腎センター	休憩室の換気扇について、スイッチ位置の確認。
2009年3月	人工腎センター	テレビに地震マットを貼付。
2009年3月	人工腎センター	避難経路上の物品の片付け。
2009年4月	医局	排水口のつまり改善。
2009年4月	医局	不要な救助袋の撤去。

図4

1-5 隔壁
H21.10.2



1-4
休憩室・手洗い
H21.10.2

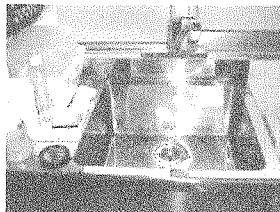


図5

積極的に関与することで、改善方向を見出すことが出来た。

今後のあり方・方向性について

『1全職員が心身共に健全に働けるようにする』
 に対しては、小項目である①～④を中心に、メンタルヘルスの相談に対して院内での更なるアピールの徹底と、相談し易い環境の整備をする。2回目の全職員を対象とした『職業性ストレス簡易調

査票』の実施を行い、各職場での問題を洗い出し職員教育の徹底を実施する。『2：全職員に働き易い環境を提供する』に対しては、1回/月の院内巡視を継続し、今後は各部署に於ける・照明・騒音・劇薬・清掃状態・休憩時間・カンファレンス状況などの職場環境のみならず、各職場での職員の心身面での訴えにも積極的に耳を傾けることとした。

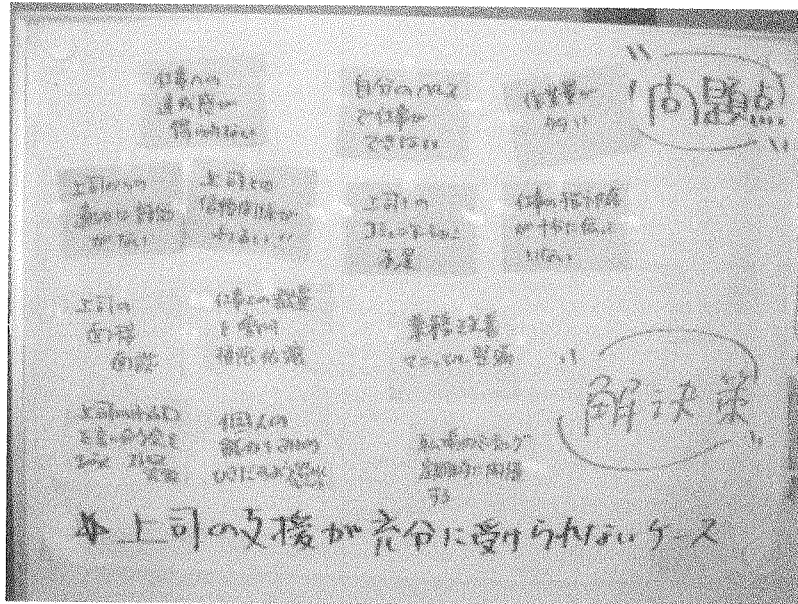


図6

考 察

2007年7月、衛生委員会の本格的な活動が再開された当初は、正に暗中模索の時期であり、衛生委員会の各委員の間では衛生委員会としての活動方向やその役割を理解することに明け暮れていた。諸先輩病院やメンタルヘルスを専門とする産業医の御指導を仰いだり、衛生委員会としてメンタルヘルスの参考書を用いて機会ある毎に勉強会を開催し積極的に意見交換をしたりした。その結果『援助する者』と『援助される者』との関係から『関わること』の重要性を見出し¹⁾、全職員を対象とした職業性ストレス簡易調査票を実施した頃から、ようやくおぼろげながらに衛生委員会の重要性や方向性が見え初めて来たのも事実である。医療従事者にかかるストレスはその職業上の特性から単純に表出出来ないこともあり、病院職員が抱かえるストレスには係り知れないものがある²⁾。本来病める人々を手当てする側の人間にストレスが多いことは本末転倒ではあるものの、現状としてはこの状況の中で、心身共に健全に近付けて行く役目を担うのが衛生委員会の役割であると思われる。そのため、今後は職場内でのストレス関連疾患スタッフへの対処法を含めた教育の必要性も重要であると思われる³⁾ 職業性ストレスと疾病との関連性についてはさまざまな研究がなされており^{4,5)}、過重労働による職場のメンタルヘ

ルスに対する健康障害へのアプローチの報告も散見され⁶⁾、将来的には地方中核病院での実践取り組みに生かされることが期待出来るものと思われる。

当院での衛生委員会は、その長が病院長であり、事務部長も委員として参加しているため、院内巡視によって得られた各職場における諸問題に対して定期的に開催される衛生委員会内での迅速な回答および行動が可能である。今後も、この小回りの利く衛生委員会を通じて、全職員を対象として心身の健康の一端を担って行ける衛生委員会へと成長して行ければ、各委員にとってもこの上無い喜びである。

おわりに

高山日赤に於ける衛生委員会が再結成されてから2年余りの活動状況を中心に、今後のあり方や方向性について報告した。高山日赤衛生委員会は、まだまだ暗中模索の状態であり、特に今後の方向性については、日本赤十字社本社および諸先輩日赤各病院や近隣のメンタルヘルス先進病院との情報交換を通じて、より良い方向へと積極的に活動して行きたい。

参考文献

- 1) 熊倉伸宏、メンタルヘルス原論、第1版、東京、2004、101-117.
- 2) 吉川 徹、医療従事者の労働安全衛生一適切

- なケアの提供と職業上のリスクへの対応方法、安全衛生コンサルタント、27巻、7-17、2007.
- 3) 芦原 睦、実践！ここから始めるメンタルヘルスー予防から復職までー、第1版第2刷、東京、2007、23-28.
 - 4) Johnson JV. Hall EM, Job strain, work place social support, and cardiovascular disease: a cross-sectional study of a random sample of the Swedish working population, Am J Public Health, 78, 1336-1342,1988.
 - 5) Siegrist J, Adverse health effects of high-effort/low-reward conditions, J Occup Health Psychol, 1, 27-41, 1996
 - 6) 堀 礼子、過重労働による健康障害へのアプローチ、心身医学、50巻、635-639,2010.